



日本植物病理学会ニュース 第70号

(2015年5月)

【評議員選挙電子投票のお知らせ】

平成28～29年度評議員選挙は電子投票により行います。電子投票が行えない方は、従来の郵送による投票も行えます。詳しくは、本号青ページに掲載されている選挙告示をご覧ください。

【学会等行事予定カレンダー公開のお知らせ】

日本植物病理学会及び関連学会等の行事予定を、学会ホームページにてカレンダー形式で公開しています。

<http://www.ppsj.org/event/calendar1.html>

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成27年度大会は、創立100周年記念大会の一部として3月29日(日)から31日(火)までの3日間、明治大学駿河台キャンパスのリパティタワーにおいて開催されました。2003年に平成15年度大会を米山勝美大会委員長のもとで開催して以来、12年ぶりの明治大学での大会となりました。会期中は好天に恵まれて東京のソメイヨシノは一気に満開となり、創立100周年記念大会を祝福するよう感じられました。今回は、6月に行われた札幌大会の直後から大会ホームページの立ち上げを目指して作業をしましたが、創立100周年記念大会として記念事業と大会ホームページをひとつにまとめるために作業量が多く、ホームページの開設が遅れてしまいました。そのため、講演要旨の受付期間からプログラムの確定までのスケジュールがタイトになってしまい、プログラム委員長の森山裕充先生、プログラム委員を務めていただいた東京農工大学の委員の皆様には多大なご苦労をおかけしました。前回の札幌大会と同様に発表用のファイルをUSBメモリーで提出してもらおうことといたしましたが、発表者の皆様のご協力のお陰でスムーズにファイルを受付けることができ、滞りなく研究発表を進めることができました。大会運営にご協力いただきました皆様に改めまして感謝いたします。

今年度の講演題数は409題で、学生による発表は150題でした。本年度より学生の就職活動の解禁が3ヶ月後ろ倒しになった影響もあり、学生演者が変更となるケースが例年より多かったと感じました。事前参加登録期限後に、各方面からのご要望と創立100周年記念大会を盛り立てる意味合いから追加参加登録として3月20日までの締め切りを再設定しました。大会直前まで登録名簿と支払い確認作業や名札印刷では苦労をおかけしましたが、最終的には創立100周年記念大会ということもあり、大会参加者は1000名を越えて盛会のうちに閉会を迎えることができました。

最後になりますが、平成27年度大会が無事終了できたことを、本大会の開催にサポートいただきました学会役員と事務局、評議員の皆様、そして記念大会にご参加くださったすべての皆様に改めて厚くお礼申し上げます。

(桑田 茂)

2. 部会開催報告

(1) 北海道部会

平成26年度日本植物病理学会北海道部会は、10月16日、17日に北海道立道民活動センター「かでの2.7」において開催され、55名の参加があった。初日に開催された第216回談話会では、「病害防除対策の新たな取り組み」をテーマに講演が行われた。(1)山名利一氏(道総研中央農試)による「コムギ雪腐病に対する殺菌剤早期散布技術」、(2)安岡眞二氏(道総研十勝農試)による「ジャガイモ黒あし病の蔓延防止対策」、(3)中山尊登氏(北海道農研)による「ジャガイモ粉状そうか病の蔓延防止対策」、(4)志村華子氏(北大農院)による「アスコルビン酸を利用した作物のウイルスフリー化技術」の計4題の講演発表が行われた。山名、安岡、中山各氏からは、寒冷地である北海道で問題となっている各病害に対して、過去の農薬試験成績の解析や地道な対策の積み重ねによって、新たな防除技術の確立に取り組んでいる事例が紹介された。また、志村氏からは、アスコルビン酸を利用した組織培養における効率的

なウイルスフリー化技術の発表があり、アスパラガスでの事例の紹介があった。2日目の一般講演では19題の研究発表があり、活発な質疑が行われた。また、総会において、次期部会長として北海道農業研究センターの眞岡哲夫が選出された。(眞岡哲夫)

3. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第25回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

第25回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、平成27年1月15日に東京農業大学グリーンアカデミーホールで開催された。今回は単独での年明け早々の開催となったが、公的研究機関、農薬メーカーおよび農業団体など計115名の参加を得て、終日、熱心な討議がなされた。

各県における耐性菌発生の事例報告として2題の講演があり、長野県農業試験場の山下亨氏から「長野県における*Pythium arrhenomanes*に起因するイネ苗立枯病の発生とメタラキシルに対する感受性」と題し、耐性菌の発生状況に加え、*Pythium*属菌による苗立枯病の発生生態、耕種の防除を含めた防除対策についてご報告いただいた。青森県産業技術センター野菜研究所の山下一夫氏からは「青森県におけるニンニク白斑葉枯病菌及び葉枯病菌の薬剤耐性菌の出現」と題して、各種薬剤に対する耐性菌の発生状況のご報告とともに、耐性菌対策としては予防散布を主体とした体系防除が必要であり、また、普及指導員や生産者へ正確な情報提供と防除対策の理解を深めて実践させる指導が必要であるとの提言があった。

新規殺菌剤関連では、石原産業(株)の佃晋太郎氏から「新規殺菌剤イソフェタミドの作用特性と感受性検定」と題し、本剤がチオフェンカルボキサミド骨格を有する新規のSDHI剤(コハク酸脱水素酵素阻害剤)であること、また、本剤の生物活性、作用特性および感受性検定等についてご説明いただいた。本剤は既存のSDHI剤耐性菌に対しても効果を示すが、耐性菌出現を回避するには作用点の異なる剤とのローテーション散布の指導、混合剤開発などの推進が必要とされた。

前回に続きQoI剤耐性イネいもち病菌の話題として、平成26年度に新たに耐性菌の発生が確認された滋賀県、岐阜県および三重県から耐性菌の発生および対応状況についてご報告いただいた。滋賀県病害虫防除所の下川陽一氏、岐阜県農業技術センターの野村康弘氏、三重県農業研究所の黒田克利氏から、各県におけるモニタリング調査、耐性菌の発生と分布状況を踏まえた当年および次年度以降の対応策についてご報告いただいた。各県ともに耐性菌を確認後に速やかな情報発信が行われ、また、関係機関との協議

を経て速やかに対応策の情報提供がなされている。三重県では飼料用イネにおいて流通種子に起因すると考えられる耐性菌が認められたことから、飼料用イネのいもち病対策、健全種子の確保と流通等が課題であると提言された。

今回、耐性菌検定事業とデータの現場への生かし方と題して、2題の講演とパネルディスカッションを行った。栃木県農業環境指導センターの森島正二氏から「栃木県におけるイチゴ主要病原菌の薬剤感受性」として、検定の対象とする病害および薬剤の選定から、検定方法および結果、その結果のHPでの公表等による活用まで検定業務の流れをご説明いただいた。また、直面する問題として、絶対寄生菌の菌株維持、感受性検定方法の変更に伴う過去の試験結果との整合性等が挙げられた。奈良県農業開発センターの平山喜彦氏からは「奈良県における薬剤耐性イチゴ炭疽病菌対策の取り組み」と題して、各種薬剤に対する耐性菌の発生状況、保護殺菌剤を主体とした防除体系の開発、その情報と技術の現場への普及についてご報告いただいた。また、防除体系の普及に成功した事例から、現場への普及には生産者がどのような情報や技術を求めているかを念頭において研究や開発を行っていくことが重要とされた。

パネルディスカッションでは当研究会幹事の稲田稔氏および外側正之氏を座長として、森島正二氏および平山喜彦氏にパネラーとしてご参加いただき、耐性菌検定事業における問題点の現状と今後の検定事業のあり方について総合討論を行った。耐性菌検定事業の重要性は皆が認識しているが、検定には時間と労力がかかる等の問題をどう克服していくかが今後の課題と考えられた。技術的な問題点としては、感受性検定方法が不明である、または、同系統の薬剤についての検定方法がメーカーによって異なる等が挙げられた。また、検定方法の整備は殺菌剤耐性菌研究会が主体性をもってやるべきとのご意見もあり、今後、当研究会の中でも協議していきたい。

今回のシンポジウムの開催に当っては、根岸先生をはじめ東京農業大学関係者の皆様にご協力をいただいた。改めて厚くお礼申し上げます。(菊武和彦)

(2) 第15回植物病原菌類談話会

日本植物病理学会創立100周年記念大会2日目の平成27年3月30日に一般講演終了後の16:30~20:40まで、明治大学リパティタワー1011教室にて、大会開催実行委員会の明治大学の多大な御支援も頂き、第15回植物病原菌類談話会を開催した。大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、検疫機関、農薬や種苗会社、農業団体など、学生・研究者167名の参加があった。

今回の談話会のコーディネーターは静岡県農林技術研究所の鈴木幹彦幹事が務め、「コッ、コッ、コッ：教科書には載っていない、知っている便利な裏技編」というテーマの下、植物病原菌類を現場等で取り扱う上で、重要な実際の技術的なコッについて、談話会幹事3名による紹介と解説を行った。講演者およびその講演題目は、荒川征夫氏（名城大学農学部）「現場でできる病原菌採取のコッや裏技」、森川千春氏（石川県農林総合研究センター）「研究室での菌分離や観察でのコッや裏技」、佐藤豊三氏（農業生物資源研究所）「ToyS 顕微鏡撮影法と BLAST のコッや裏技」であった。講演内容は、病徴試料採取地点の GPS 情報を用いた記録法、日本植物病名データベースの病害診断現場での利用法、植物宿主の分子同定法とその現場での試料調整法、分離菌や植物の rDNA-ITS 塩基配列情報における混合配列の識別法、病害の「臭い」の記憶法、病原菌構造の現場での前処理法、宿泊先での病原菌分離法、研究室での菌分離や観察におけるティーチングヘッドの活用法、顕微鏡利用時におけるコンデンサー絞りの活用法、顕微鏡観察に基づく分離法の選択、テープ等を利用した簡易プレパラート作製法、エルジロイ線・タングステン線の電気分解による菌分離・作業用有柄針加工・作成法、果樹枝幹病害の無殺菌分離法、試験管内の菌糸構造やシャーレ裏面からの観察法、スマートフォンによる顕微鏡写真の撮影法、BLAST 検索のコッ・注意点等、極めて多岐な内容であった。

さらに、本談話会では、農林水産省消費・安全局植物防疫課国内検疫班の後藤 慎氏に講演を依頼し、平成 24 年に定められた「重要病害虫発生時対応基本指針」に関わる現場研究者等の対応すべき内容について、情報提供として具体的かつ詳細な紹介・解説をいただいた。

本談話会の開催準備にあたり多大なご支援を頂いた明治大学の大会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせた本談話会の開催を予定しています。（青木孝之）

(3) 技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナー

平成 27 年度技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナーは、日本植物病理学会大会（明治大学リパティタワー）の会場にて、第 2 日目（3 月 30 日）に、当学会技術士対応委員会主催のもと開催された。本セミナー開催に当たっては、桑田 茂大会委員長をはじめとする大会委員の皆様には会場設営などにあって、特段のご配慮をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

今年度の本セミナーは第一部（13:00～13:50）と第二部

（14:00～15:10）に分け、技術士第一次試験と第二次試験のそれぞれを目指す方々の受講に配慮した。また、本年度も新合格者の方々に講師に招き、講演・ディスカッションに加わっていただいた。第一部では、技術士対応委員長 難波成任氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）より、技術士制度概要と第一次試験（農業部門）の受験状況について説明が行われ、濱本 宏氏（法政大学生命科学部）より、第一次試験の概略と受験申込みの手順などについて説明があった。次いで、「第一次試験合格体験」として新合格者の煉谷裕太郎氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）、石川 亮氏（住化グリーン（株））より、受験の動機、どのような勉強を行ったか、当日何を心掛け、どのように解答したのかなどのお話を伺った。さらに、栢森美如氏（北海道立総合研究機構十勝農業試験場）、大島研郎氏（法政大学生命科学部）、根津 修氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）にご登壇いただき、難波氏の司会のもと、昨年度の第一次試験問題等を用いながら質疑応答・ディスカッションを行った。適性試験のように普段なじみのない問題にどのように勉強すればよいのか、など積極的に質問が出され、活発な議論が行われた。第二部では、最初に難波氏より、植物保護関連 5 学会として「農業部門・植物保護」の技術士が 100 人を超えることが当面の目標であること、本年 12 名が技術士二次試験に合格し、累計合格者数が 94 名に達したことが説明され、今後、植物保護の技術士を目指して第一次試験を受験した合格者が受験することで、第二次試験（植物保護）の受験者がさらに増加すると話された。次いで鍵和田 聡氏（法政大学生命科学部）より、第二次試験の概略と受験申込みの手順等について説明があった。続いて、「第二次試験対策のポイント」として、業務経歴票と必須科目の筆記試験について志岐悠介氏（横浜植物防疫所）、選択科目の筆記試験について堅石秀明氏（株）クレハ）、口頭試験について藤川貴史氏（果樹試験場）より丁寧な解説があった。最後に、栢森氏と、新合格者の落合則幸氏（株）LSI メディエンス）、山次康幸氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）にご登壇いただき、難波氏の司会のもと第二次試験対策を中心に、総合的な質疑応答・ディスカッションを行った。昨年の試験問題に対する具体的な解答法から、植物保護の技術士の活躍の展望まで、会場の先輩技術士の方々からの意見もいただきながらの活発な議論が行われ、盛況のうちにセミナーを終了した。なお、本セミナーで配布した資料は、これまでに開催したセミナーの資料とともに会員限定で配布されている。日本植物病理学会のホームページの「技術士」の項を参照していただきたい。

本年度で4年連続の第5回目の開催であるが、セミナーの参加者は民間、大学、都道府県、独立行政法人等から55名を数えた。参加者並びに講演者に対し、主催者一同心よりお礼を申し上げる次第である。(技術士対応委員会)

4. 技術士対応委員会

平成26年度技術士第二次試験(農業部門・植物保護)で12名が合格

平成27年3月2日に平成26年度技術士第二次試験(農業部門・植物保護)の合格者が発表され、次の12名の方が合格されました(敬称略)。

提箸祥幸(北海道農業研究センター)、小形智子(北海道後志農業改良普及センター;本会会員)、久池井豊(デュボン株式会社;本会会員)、山崎あゆみ(東京都島しょ農林水産総合センター大島事業所)、小倉愉利子(群馬県農業技術センター)、植原健人(農研機構中央農業総合研究センター;本会会員・日本応用動物昆虫学会会員)、山次康幸(東京大学大学院農学生命科学研究科;本会会員)、溝口勝夫(株式会社幽芳園;本会会員)武山桂子(愛知県農業総合試験場;本会会員)、津野賢一(中国四国農政局)、落合則幸(株式会社LSIメディエンス;本会会員)、小暮勇樹(北興化学工業株式会社;本会会員)。

今回の合格者を合わせ、技術士第二次試験(農業部門・植物保護)合格者は計94名となりました。今回は、これまでで最も多い4名の女性が合格されました。引き続き、都道府県や民間企業、大学等の教育機関など、さまざまな職場から多くの方の受験をお願いします。平成27年度の技術士第一次試験は平成27年10月12日(月・祝)に行われ、受験申込締切は平成27年7月1日(水)です。また、技術士第二次試験の筆記試験は平成27年7月20日(月・祝)に行われます(受験申込は4月下旬に締め切られています)。詳細は日本技術士会のホームページの試験・登録情報から、試験の実施案内について御確認ください。

日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会は、技術士・農業部門・植物保護の社会での活躍について、積極的に取り組んでいます。平成27年度も多くの技術士(農業部門・植物保護)の誕生を期待しています。

【今後の学会活動予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日程：平成27年10月15日(木)～16日(金)
場所：北海道大学(札幌市)

(2) 東北部会

日程：平成27年9月28日(月)～29日(火)
場所：東北大学川内キャンパス(仙台市)

(3) 関東部会

日程：平成27年9月10日(木)～11日(金)
場所：宇都宮大学農学部(宇都宮市)

(4) 関西部会

日程：平成27年9月28日(月)～30日(水)
場所：徳島県郷土文化会館あわぎんホール(徳島市)

(5) 九州部会

日程：平成27年11月11日(水)～12日(木)
場所：ホテルセントヒル長崎(長崎市)

2. 談話会・研究会等

(1) 第11回植物病害診断教育プログラム

日程：平成27年7月27日(月)～31日(金)
場所：神戸大学(神戸市)

(2) 平成27年度植物感染生理談話会

日程：平成27年8月24日(月)～26日(水)
場所：道後温泉メルパルク松山(松山市)

(3) 第9回植物病害診断研究会

日程：平成27年10月26日(月)～27日(火)
場所：ALVE多目的ホール(秋田市)

(4) EBC研究会ワークショップ2015(第11回)

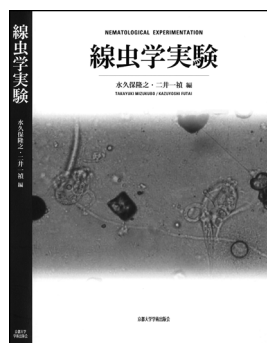
日程：平成27年9月15日(火)
場所：JAビル会議室(千代田区)

【書評】

線虫学実験

水久保隆之・二井一禎 編 京都大学学術出版会
B5判並装 380頁

ISBN978-4-87698-538-8 定価3,800円+税



線虫学実験は、日本線虫学会の創立20周年を記念して企画刊行された線虫学の実験書である。企画にあたっては、現行版である日本線虫学会編「線虫学実験法」(2004年刊行)をベースに、この10年で目覚ましい発展を遂げた遺伝子解析技術を追加し、図解を盛り込んだビジュアル化を基本方針とした。さらに、生理学・生態学等の各分野で紹介に値する新しい実験手法が開発され、国内で近年大きく発展した分野が存在することをふまえ、行動

解析実験法、環境耐性研究法、群集生態学研究法等を標題とする章を新たに設けた。執筆陣には線虫学会の外からも新進気鋭の研究者を迎えた。構成も大きく変わり、旧版の章は、学際的な日本線虫学会の構成を反映し応用科学上の分類枠(作物保護系・林学系・生物学系)に準じた構成だったが、新版の章は、「線虫学」を標榜するため自然科学の学問分類である生物学の体系で構成した。即ち、生物学の中の体系学(systematics)、分子生物学、遺伝学、動物行動学、生態学、生理学に沿う構成に改め、下記の3部と巻末の附録の4部構成とした。

第1部 線虫の分類・同定法

第2部 生理・生化学的実験法

第3部 生態学的実験法

附録 線虫を材料にした「新しく面白い」研究例

この他、実際の研究を紹介する囲み記事を随所に盛り込んだ。各項目の執筆内容を精選したが追加項目も多く、総ページ数は旧版より約50ページ増加した。

第1部では、線虫を実験材料にする者が通らねばならない線虫の分類、同定法が取りあげられている。前半では、基本的な形態分類の理解のための構造特性の解説と、その前段作業である採集法、簡易な分離法、光学顕微鏡の使い方が述べられる。光学顕微鏡観察のための基本技術を述べた上で、目、科レベルでの分類同定に必要な形態各部の特徴を詳説している。読者はこの形態分類法を通読することにより生物としての線虫類の情報を把握でき、第2部、3部に取り上げられた実験で問題点に遭遇するたびにこの章に戻り、線虫の生物としての側面を確認できる。目や科のレベルの同定は、本実験書を用いて訓練すればある程度の熟度に達することができるが、種の同定となると、対象分類群を絞り込み、さらに細部にわたる訓練が必要であった。しかし、近年の分子生物学的な技法を用いることにより、一定の手順を踏んだ操作により比較的短時間で種の同定が可能になりつつある。第1部の後半では、近年目覚ましい勢いで発展したこの分子同定技術を詳説し、これまで難関であった線虫同定への道を拓く。ただし、線虫の分類・同定は分子同定技術だけでは完結せず、前半部の形態的分類に関する知識と補完してはじめて全体的な把握が可能となることを付記しておく。

第2部では、生理・生化学的研究法が取りあげられている。ここでは、線虫の入手法・培養法・保存法といった初学者がぶつかる具体的な問題を、対象線虫の生態グループ毎に取りあげ、研究開始を容易にすると共に、生態グループ毎に線虫の行動を解析する実験法を紹介する。線虫は昆虫の寄生者であり便乗者でもあり、その培養法や行動解析

法が紹介される。さらに、ペストとしての線虫を対象とした研究手法として、寄主植物との感染応答という基礎生物学的な研究から、殺線虫剤試験法(化学的防除法)という応用的な研究までを取りあげている。さらに、ある種の線虫は環境の悪化を乗り越えるための適応を遂げており、極限環境における生物の生理・生化学的な適応現象を研究する優れた材料であることが知られている。この分野についても、多くの線虫種を対象に、実験手法が紹介され、線虫という生物の面白さが伝わってくる。

第3部では、線虫を対象とした生態学的研究法が紹介される。土壌生物として、種数、個体数とも他の生物グループを圧倒する線虫類は、個体群生態学や群集生態学の研究材料として優れた特徴を備えた生物である。しかし、これまで、種の同定が困難であったため、生態学的な研究には目立った発展は望めなかった。しかし、分子生物学的な分類・同定技法の発展により、この分野の研究が可能となり、近年著しい発展を遂げた。ここでは、このような土壌線虫の生態学的研究の実験技術が詳説されるとともに、その生息環境としての土壌の取り扱いが紹介され、数学的取り扱いや統計的取り扱いについても触れられている。前半では、個々の種についての個体群生態学的な研究手法が取りあげられ、後半では群集生態学的な取り扱いが紹介されている。

これら3つの部のなかで、特に興味深い実験法や、特別に触れるべき課題については、それぞれの部の対応する部分に囲み記事として取りあげている。巻末に、線虫学において実施された最近の研究のうち、生物学研究全体の中でも際立った少数の例を附録として添付することにより、線虫学研究的展望を初学者、研究者に提供している。

このように、マイクロとマクロ、実験室とフィールドの各研究分野が相互に刺激しあって発展してきた線虫学の広範な実験手法の現状を本書に網羅し、基礎研究から農業や環境保全への応用まで総合的理解が提供されるように努めた。線虫学を学ぼうとするすべての方々に必読の書である。

(荒城雅昭)

【学会ニュース編集委員コーナー】

国会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司, 吉田重信, 宇賀博之, 宇垣正志, 松下陽介

編集後記

学会ニュース第70号をお届けします。本号は、大会と研究会・談話会の報告を中心に掲載しました。

本会にとって大きな節目である創立100周年の記念式典が3月28日(土)に明治大学で開催されました。当日は式典を言祝ぐようにさわやかな春の好天に恵まれ、国内外の来賓を含む多数の参加者によって式典は厳粛かつ盛大に執り行われました。記念式典、記念シンポジウムのあと、会場をホテルへ移し祝賀会が華やかに開催されました。記念すべき式典行事が盛会裡に終わりましたことを心からお慶び申し上げます。5年以上にわたり精力的に準備を進め運営にご尽力されました難波委員長をはじめ実行・運営委員の皆さま、土屋学会長をはじめとする関係の皆さまの多大なご苦勞に深く感謝し敬意を表します。また、それを支えていただいた学会員の皆さまのご協力と行事への参加にお礼申し上げます。

記念大会は、記念式典行事の翌日から31日(火)までの3日間にわたり記念式典と同じ明治大学で開催されました。参加者は1000名を越し、学生による発表課題は例年より少なかったようですが講演題数は409題に及び、式典行事の疲れを感じさせない活発な質疑が行われました。大会委員長の明治大学の桑田先生をはじめ大会運営委員の皆様には、記念式典行事の設営運営もあって多くのご負担をおかけしましたご苦勞に心から感謝の意を表したいと思えます。

北海道部会は昨秋に2日間にわたり開催されました。一般講演とともに、寒冷地の北海道で問題となる病害の新たな防除対策の事例を紹介した特別講演も行われ、熱心に討議されたことがうかがわれます。

殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムが年明けに、また植物病原菌類談話会が大会期間中に開催されました。いずれの会も100名を上回る参加者があり、興味深い講演、それを受けた熱心な質疑が行われています。活発な学会活動状況の継続を喜ばしく思います。研究会・談話会を運営された幹事の皆様に感謝申し上げます。

学会活動予定として、これから行われる部会や研究会・談話会などの開催案内を掲載しました。多くの皆様のご参加をお願いします。

平成26年度は12名の方が農業部門・植物保護の「技術士」に合格されました。誠にありがとうございます。農業部門・植物保護の「技術士」は、累計合格者数が94名を超え、当面の目標である合格者数100名に限りなく近づいています。大変喜ばしい状況です。これも、受験された皆様のご努力とともに、技術士対応委員会をはじめとする関係皆様のご尽力のおかげです。本年も大会期間中に技術士対応委員会主催で試験対策セミナーが開催されています。55名の参加者で熱気に充ちたセミナーとなっています。今後も多くの皆様の合格を期待します。

学会ニュース編集委員会のメンバーが変わりました。有江力、奥田充が退任し、吉田重信、松下陽介が新たに加わりました。新メンバーで学会ニュースの編集に新たな気持ちで取り組んでまいりますので、引き続きのご愛読をよろしく願いいたします。
(高橋賢司)
